

各火山の 2 月の活動解説

【北海道地方】

雌阿寒岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

9日に第一管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測では、ボンマチネシリ第4火口において融雪域が観測されており、2016年9月の現地調査で消散が確認された地熱域¹⁾が再びみられるようになった可能性がある。その他の火口については特段の変化はみられなかった。

ここ数年、地震増加、浅部熱活動の活発化を示す96-1火口の噴煙量増加や全磁力²⁾の変化などがみられていることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

十勝岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

9日に第一管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測では、62-2火口や大正火口で、火口周辺の融雪域の広がりや噴煙の状況に特段の変化はみられなかった。振子沢噴気孔群では、2015年6月以降見られている地熱域に対応した融雪域を確認した。前回（2016年1月15日）の観測と比較して振子沢噴気孔群の噴気量は多くなっており、融雪域の範囲から地熱域は拡大していると考えられる。62-2火口とその周辺では熱活動のやや高い状態が継続していると考えられる。

ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

樽前山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

9日に第一管区海上保安本部の協力により実施した上空からの観測では、山頂溶岩ドーム周辺の噴気等の状況に変化はみられなかった。

一方、山頂溶岩ドーム周辺では、1999年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

大雪山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

倶多楽〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

有珠山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

北海道駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

恵山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【東北地方】

秋田駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

女岳^{めだけ}の山頂付近では、地熱域が引き続き確認されている。

地震活動は低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に留意が必要である。

蔵王山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動に特段の変化はなかった。

16日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、御釜とその周辺、^{ほらいがわ}葎川上流域及び2016年10月の現地調査で植物の枯れた領域を確認した傾城岩^{けいせいいわ}付近に噴気や地熱域はみられず、丸山沢の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。また、2015年に温泉湧出が認められた振子沢付近に高温域は認められなかった。

蔵王山では、2013年から2015年にかけて火山活動の高まりがみられた。その後も火山性地震や火山性微動が時々発生していることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

吾妻山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

大穴火口付近での熱活動は継続しているので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

14日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、大穴火口の噴気及び大穴火口周辺の地熱域に特段の変化は認められなかった。また、2015年10月から2016年にかけての現地調査で弱い噴気や地熱の高い領域を確認した大

穴火口北西では、引き続き地熱の高い領域を確認した。

山に入る際には、火山ガスに注意が必要である。また、大穴火口付近で噴出現象が突発的に発生する可能性があることに留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

いわきさん
岩木山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

はっこうださん
八甲田山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

とわだ
十和田 [噴火予報（活火山であることに留意）]

あきたやけやま
秋田焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

いわてさん
岩手山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ちょうかいさん
鳥海山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

くりこまやま
栗駒山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

あだたらやま
安達太良山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ばんだいさん
磐梯山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】

くまつしらねさん 草津白根山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

奥山田監視カメラ（湯釜の北約 1.5km）による観測では、引き続き湯釜北側噴気地帯の噴気孔から噴気が認められた。湯釜からの噴気は認められなかった。東京工業大学の監視カメラ（湯釜火口内）では、火口内に特段の変化は認められなかった。

1 日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、前回の観測（2016 年 5 月）と比べ、湯釜火口壁北側、水釜火口の北から北東側の斜面の状況に特段の変化はなく、引き続き地熱域が認められた。

湯釜火口及び水釜火口周辺の熱活動は高まった状態が継続している。

全磁力観測によると、2014 年 5 月以降の湯釜近傍地下の温度上昇を示唆する変化は、2014 年 7 月に停滞したものの、温度低下を示唆する変化には転じていない。また、東京工業大学によると、2014 年以降、湯釜湖水の化学組成は火山活動の活発化を示す状態であることが確認されている。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒

が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

あさまやま 浅間山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

火山活動はやや活発な状態で経過している。

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上概ね 700m 以下で経過している。山頂火口で、夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映⁴⁾が時々観測された。

今期間実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 1,300～3,000 トン（1 月：1,500～3,600 トン）と多い状態が継続している。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震は、25 日に 166 回となるなど多い状態で経過した。地震回数が 150 回を超えたのは、2015 年 6 月 30 日以来である。

2015 年 6 月上旬頃から 12 月にかけて、山頂の南南西にある塩野山の傾斜計⁶⁾でみられていた北または北西上がりのわずかな変化が、2016 年 12 月頃から再びみられている。国土地理院の GNSS⁷⁾連続観測によると、浅間山を南北に挟む基線で 2016 年秋頃から小さな伸びがみられている。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

にいがたやけやま 新潟焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

山頂部東側斜面の噴気孔からの噴煙は、火口縁上概ね 100m 以下で経過しており、引き続き 2015 年夏以前と比べてやや高い状態が続いている。

2016 年 5 月 1 日以降、振幅の小さな火山性地震がやや増加したが、その後、火山性地震は次第に減少している。

GNSS 連続観測では、2016 年 1 月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられていたが、夏以降は停滞傾向が認められる。

今後の火山活動の推移に引き続き注意が必要である。

弥陀ヶ原 [噴火予報(活火山であることに留意)]

監視カメラによる観測では、地獄谷からの噴気の高さは、概ね 200m 以下で経過した。

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過した。

立山地獄谷では以前から熱活動が活発な状態が続いている。2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

御嶽山 [火口周辺警報(噴火警戒レベル 2、火口周辺規制)]

監視カメラによる観測では、噴煙活動に変化はなく、白色の噴煙が火口縁上概ね 500m 以下で経過している。

山頂直下付近の地震活動は、回数は少ないながらも継続している。火山性微動は観測されなかった。

火口列からの噴煙活動や地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

箱根山 [噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

大涌谷に設置している監視カメラによる観測では、大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出しているのを確認している。大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 500m 以下で経過した。

火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過した。火山性微動は観測されなかった。また、地殻変動観測では、特段の変化はみられていない。

一方、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがあるので、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

伊豆大島 [噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

16 日に実施した現地調査では、中央火孔内では、引き続きごく弱い噴気が認められた。その他、三原山山頂周辺の噴気温度に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過した。震源は三原山周辺の浅いところと西方沖に分布している。

地殻変動観測によると、短期的な膨張と収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。その他の観測データには特段の変化はなく、火山活動は静穏に経過している。

三宅島 [噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

山頂火口からの噴煙の高さは、概ね 200m 以下で経過した。

1 日及び 20 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量はいずれも 1 日あたり数十トン以下であった（前回 2017 年 1 月 13 日：数十トン以下）。

7 日に実施した現地調査では、前回の観測（2017 年 1 月 22 日）と比べて、火口内の地形及び噴気の分布に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過した。震源は山頂火口直下に分布しており、これまでと比べて特段の変化は認められない。火山性微動は観測されなかった。

主火孔における噴煙活動が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性がある。山頂火口内⁸⁾及び主火孔から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出がわずかながら継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

**西之島 [噴火予報(活火山であることに留意)]
←14 日火口周辺警報(火口周辺危険)から噴火予報(活火山であることに留意)に引下げ**

西之島では、火山活動の低下した状態が続いており、新たに形成された山体は、概ね安定した状態になり、噴火が発生する可能性はほとんどなくなったものと考えられる。このことから 14 日 18 時 00 分に噴火予報を発表し、火口周辺警報を解除した。

火口周辺には高温部が残っているほか、海岸部では崩れやすくなっている。引き続き注意が必要である。

硫黄島 [火口周辺警報(火口周辺危険)及び火山現象に関する海上警報]

火山性地震は、多い状態で経過している。特に 1 月 31 日から 2 月 2 日にかけてと、2 月 24 日から 26 日にかけて火山性地震が増加し、1 日には 159 回、25 日には 108 回の火山性地震を観測した。火山性微動は観測されていない。

阿蘇台東監視カメラ（阿蘇台陥没孔の東北東約 900m）による観測では、島北西部の井戸ヶ浜からの噴気は認められなかった。また、島西

部の阿蘇台陥没孔からの噴気の高さは概ね 100 m 以下で経過した。

GNSS 連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。1 月 31 日から 2 月 2 日にかけてと、2 月 24 日から 26 日にかけての火山性地震の増加に伴い、島の南部が膨張源とみられるわずかな地殻変動が観測された。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

福徳岡ノ場ふくとくおか【噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報】

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

なすだけ 那須岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にっこうしらねさん 日光白根山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

やけどだけ 焼岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

のりくらだけ 乗鞍岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

はくさん 白山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

ふじさん 富士山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

いずとうぶかさんぐん 伊豆東部火山群【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にいしま 新島【噴火予報（活火山であることに留意）】

こうづしま 神津島【噴火予報（活火山であることに留意）】

はちじょうしま 八丈島【噴火予報（活火山であることに留意）】

あおがしま 青ヶ島【噴火予報（活火山であることに留意）】

【九州地方及び南西諸島】

くじゅうさん 九重山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、GNSS 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

あそさん 阿蘇山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】 ←7日に噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ

中岳第一火口では、2016 年 10 月 8 日に爆発的噴火⁹⁾が発生した後、噴火は発生していない。

火山性微動の振幅は、小さな状態で経過している。

傾斜計にも火山活動に伴う特段の変化は認められない。また、GNSS 連続観測では、2016 年 7 月頃から認められていた、草千里深部にあると考えられているマグマだまりの膨張を示す基線の伸びは、11 月中旬以降は停滞している。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1 日あたり 500～1,000 トンとやや少ない状態で経過している。

3 日及び 15 日に実施した現地調査では、中岳第一火口内で緑色の湯だまりを確認し、湯だまり量は中岳第一火口底の約 8 割であった。

以上のように、阿蘇山の火山活動は低下しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められなくなったと判断したことから、7 日 14 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（活火山であることに留意）に引き下げた。

活火山であることから、火口内では土砂や火山灰を噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

うんぜんだけ 雲仙岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動に特段の変化はないが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

きりしまやま 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

えびの高原（硫黄山）周辺では、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められないが、熱異常域の拡大が続いている。

13 日には硫黄山の南西側に新たな噴気が確認されている。

3 日、8 日及び 21 日に実施した現地調査並びに海上自衛隊第 1 航空群の協力による上空から

の観測では、硫黄山周辺の状況に特段の変化は認められなかった。赤外熱映像装置による観測では、噴気が上がっていた周辺で引き続き熱異常域が観測された。今後の火山活動の推移に注意が必要である。

活火山であることから、火口内で、火山灰、噴気、火山ガス等の規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、留意が必要である。噴気地帯の周辺では、火山ガス（硫化水素）にも注意が必要である。

きりしまやま しんもえだけ 霧島山（新燃岳）【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）】

噴煙は火口縁を超えるものは認められず、火口内で消散した。

3日、8日及び21日に実施した現地調査並びに海上自衛隊第1航空群の協力による上空からの観測では、火口内及び西側斜面の割れ目付近で引き続き弱い噴気が認められた。赤外熱映像装置による観測では、引き続き弱い熱異常域が観測された。

火山性地震の月回数は16回（1月：20回）と少ない状態で経過した。火山性微動は2016年9月18日以降、観測されていない。

傾斜計では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

GNSS連続観測によると、新燃岳の北西数kmの地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015年1月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015年5月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015年10月頃から停滞している。

新燃岳では、火口内及び西側斜面で弱い噴気や熱異常域が引き続き確認されていることから、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

さくらじま 桜島【火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）】

桜島では、噴火は観測されていない。

昭和火口では、2016年7月26日に爆発的噴火¹⁰⁾が発生したが、その後、噴火は観測されていない。南岳山頂火口では、2016年8月まではごく小規模な噴火が時々観測されていたが、同年9月以降は観測されていない。

3日に海上自衛隊第1航空群の協力により実施した上空からの観測では、昭和火口とその周辺は前回（2017年1月11日）の観測と比較して、形状等に特に変化はなく、火口内に留まる程度の噴気が約10m上がっているのを確認した。火口底は火山灰や噴石が堆積し、閉塞していた。南岳山頂火口については、A火口、B火口ともに火口内に留まる程度の白色の弱い噴気が約10

m上がっていて、いずれの火口底も火山灰や噴石が堆積し閉塞していた。

1日、6日及び14日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり100～300トン（1月13日：200トン）と引き続き少ない状態であった。

火山性地震の月回数は137回と少ないながらも、前月（1月：67回）よりやや増加した。振幅の小さな継続時間の短い火山性微動が3日に2回発生した。火山性微動を観測したのは、2016年8月以来である。

桜島島内での傾斜計及び伸縮計¹¹⁾による観測では、山体の膨張を示す顕著な変化は認められなかった。

GNSS連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下のマグマだまりの膨張が続いている。島内では、2015年8月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016年1月頃から停滞している。

桜島の噴火活動は2016年8月以降低下しているが、始良カルデラの地下深部の傍聴が継続していることから、火山活動が再び活発化する可能性がある。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流¹²⁾に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石（火山れき¹³⁾）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

さつまいおうじま 薩摩硫黄島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】←24日に噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ

薩摩硫黄島では、1月1日から火山性地震が増加し、1月7日から9日には日回数が50回以上と多い状態であった。その後もやや多い状態で経過していたが、1月下旬以降は徐々に減少し2月5日以降は日回数が10回未満と少ない状態になった。火山性微動は2015年8月以降、観測されていない。

1月10日、12日、2月8日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり400～800トンで、昨年と同様にやや少ない状態であった。

2月8日から12日にかけて実施した現地調査及び2月21日に鹿児島県の協力により実施した上空からの観測では、これまでと比較して、噴煙や熱異常域の状況に特段の変化は認められなかった。

傾斜計や GNSS 連続観測では、火山活動に伴う特段の変化は認められない。

これらのことから、薩摩硫黄島の火山活動は低下しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められなくなったと判断し、24 日 11 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（活火山であることに留意）に引き下げた。

活火山であることから、火口内では火山灰等が噴出する可能性がある。

また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

くちのえらぶしま 口永良部島【火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）】

口永良部島の新岳では、2015 年 6 月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

白色の噴煙は最高で火口縁上 800m まで上がった。

7 日及び 27 日に実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口および新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化はみられなかった。また、赤外熱映像装置による観測では、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度は低下した状態が続いており特段の変化は認められなかった。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 1 日あたり 100~200 トン（1 月：70~300 トン）と、2014 年 8 月の噴火前よりもやや多い状態で経過した。

火山性地震は、2 月中旬に日回数 10 回を超える日が時々みられるなど一時的に多い状態となった。火山性地震の月回数は 196 回で、前月（1 月：51 回）に比べて増加し、引き続きやや多い状態で経過した。火山性微動は観測されていない。

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

新岳火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

すわのせじま 諏訪之瀬島【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、

火口周辺規制】

おたけ
御岳火口では、噴火が時々発生し、そのうち爆発的噴火¹⁴⁾は 5 回であった。このうち 27 日 20 時 36 分の爆発的噴火では、火口から 600m 付近に大きな噴石が飛散した。同火口では、期間を通して夜間に高感度の監視カメラで火映を観測した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

つるみだけ がらんだけ
鶴見岳・伽藍岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】
きりしまやま おはち
霧島山（御鉢）【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

- 1) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 2) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 3) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 4) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 5) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
- 6) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 7) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 8) 山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約 100m までの範囲を指す。
- 9) 阿蘇山では、火道内の爆発による地震を伴い、火口周辺の観測点で一定基準以上の空気の振動を観測した場合に爆発的噴火としている。
- 10) 桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体を感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した場合に爆発的噴火としている。
- 11) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。

- 12) 火山ガスと火山灰等の混合物が、水面や地表面を高速で横方向に広がり、地表の物を巻き込む現象。人体や建物、船舶等に大きな被害を与える恐れがあり、とても危険である。
- 13) 桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。
- 14) 諏訪之瀬島では、火道内の爆発による地震を伴い、島内の観測点で一定基準以上の空気の振動を観測した場合に爆発的噴火としている。